

Do-Re

北海道立図書館レファレンス通信

13 (通巻17号)

平成15年12月16日発行

【目次】

こんなのきました - 参考調査課によせられたレファレンス - “カンノミズ”ってどんな水？	1
ご存知でしたか	2
こんなのきました 番外編 あれから 300 年、忠臣蔵始末記	3
『北海道雑誌新聞総合目録』ネット版鋭意更新中！ 町村立図書館アンケートから見た総合目録	5
[特別寄稿] セルフレファレンスの楽しさを伝えたい 山崎敏晴氏 (江別市在住)	7
Librarian's Box (ししょばこ) 図書館と JIS の意外な関係	9
課員のつぶやき 日々の業務からの短信 - 司書であるということは	10
News	11
・各種研究集会等への参加・協力 ・調べ学習校から招待状 ・来館研修などにも協力	
編集後記	12



こんなのきました - 参考調査課によせられたレファレンス -

“カンノミズ”ってどんな水？

「“寒の水”の効用について書かれた資料はないか」

先日、このような質問を図書室から受けました。不明にも頭の中では「カンノミズ？」と漢字変換できず、どのような字を書くのか確認すると「寒い水と書いて、この水を飲むと風邪にかからないなどと言われている」との返事がありました。

ことわざか民間療法的一种かなあと考えながらいったん電話を置き、とりあえず数種類の参考図書のみたところ、【寒】(意味：陰暦での季節の名前。冬、立春までの約30日間をいう。)という言葉の説明の一部として記述がある資料(・)や、独立した項目として「寒の水」を説明した資料(・)がありました。

『日本民俗大辞典 上』(福田アジオ〔ほか〕編 吉川弘文館 1999 ㊦380.3/N/1 禁帯出)

寒中は水質が最も良くなるともいわれ、寒の水と称して、品質が良く色が美しいとされる寒紅の製造などにも使われた。このほか寒の気を利用して氷餅や、凍り豆腐・寒天などの食品の製造も行われる。

『日本料理由来事典 上』(同朋舎出版 1990 ㊦596.11/N/1 禁帯出)

「寒の水を飲むと風邪を引かない」 - とか、「腹の薬になる」と生水を好んで飲んだり、また寒中の水を瓶などに汲んで蓄える人もいる。

『日本国語大辞典 第二版 3』(小学館 2002 ㊦813.1/N/3 禁帯出)

かんの水 (1)寒中の水。冬の水。またそのように冷たいことのたとえにいう。(2)江戸時代の化粧水の一つ。寒中に集めた雪を壺に入れてとっておき、夏になって白粉をとく水として用いる。

『日本大歳時記 冬』(講談社 1981 ㊦911.307/KO/件)

寒の水 寒九の水 寒中の水は薬になると言い、餅を搗いたり、餅をつけたり、酒を造ったりする。ことに寒中九日目の水を、寒九の水と言って、服薬に特効ありと言っている。

これらのことから「寒の水」は昔から薬効があると、さまざま用途に使われていることが判りましたが、その薬効の由来がどこからきたのかがはっきりしません。

キーワードを「水(分類:452.9)」に限定して書架を見ていくと、『ふるさと自慢の名水を求めて』(田村修著 MBC21 1996 ㊦452.9/F)に「寒九の水」についてのエッセイがありました。このなかでは次の資料からことわざが引用されていました。

『日本の食文化大系 4 食物諺集』(東京書房社 1983 ㊦383.8/N/4)

「寒中の水を飲めばカゼを引かない」の諺が収録しており、昔のひとは「寒中の水は薬になる」「寒中の冷水を飲むと声がよくなる」「寒に入ってから九日目に汲んだ水は服薬によい」と珍重したとの解説がある。『社倉勸諭』(嘉永4年版)の末尾に、三つの「無病長寿の法」が記されていて、その最後の章は「寒の水」で、「寒三十日、毎朝水二口づつ服すれば、一切病床せず。目、歯に格別薬なり」とあり。

※ なお、『社倉勸諭』は『国書総目録 4』(岩波書店 1990 ㊦026/KO/4)で写本が三種類、版本四種類あることが確認できる。『日本経済大典 44』(明治文献 1970 ㊦330.3/TA/44)に収録があるが、この

なかでは「寒の水」についての記述を確認できず。

この記述から、江戸時代には薬効が知られていたと判断し、『和漢三才図会』やその他本草学の資料に何かないと確認すると、次の資料も見つけました。

『本朝食鑑 1』(人見必大著 島田勇雄訳注 平凡社 1976年 ㊦499.9/N71)

臘雪水 冬至の後の第三の戌の日を臘という。臘雪とは、大寒(二十四気の一つで、立春の前)の水のことである。昔からこれで茶を煮るのが一番よいとされている。衣服および肌膚を洗滌すれば、塵垢を除いて新のようになる。あるいはまた、これに物を浸せば、くさらずきくいむしがつかない。それで、臘雪を陶甕すやまのかめに収蔵め、氷の貯蔵と同じように深山陰谷の土中に埋めたり、家塾・後園の陰い処にわくらに置いたりして、翌年の春夏になって用いるのである。(後略)

『本朝食鑑』は江戸時代の食療本草書。国産の食物442種について「本草綱目」の分類と解説形式にのっとり記述。「本草綱目」にとられることなく、特に「集解」における動植物の形態・生態などの記事は著者の体験に基づくことが多く、漢名と和名の同定もかなり厳密である。物産学・民俗学的記述も実証性に富み博物学的な書である。

「臘雪水」と記述されていますが、内容的には「寒の水」のことと判断され、
~ の資料と共に の資料を紹介し、調査を終了しました。

ご存知でしたか？

『政党マニフェスト』の収集提供

JLAメルマガ情報 No.181 によれば「選挙期間中は図書館での閲覧提供はできない」そうです。また、「当該政党から合法的に入手し、閲覧することについて了承を得る」必要があるとのこと示されています。

地形図に図書館マーク

11月13日発行の2万5千分の1地形図から、新たに図書館の地図記号が採用されました。以前は「図書館」と文字で表記していましたが、本を開いたマークになりました。見やすさと、図書館の公共性の高さが、新設の理由のようです。(1万分の1地形図では既に使われていましたが、ほとんどが大都市でした)



図書館記号

『図書館雑誌』に新連載「霞が関だより」

10月号から文部科学省による「霞が関だより」の連載がスタートしました。国の図書館政策を知る上で必読です。

1 始まりはカウンター

時は元禄、いや平成 14 年師走も押し迫った霜月の頃（…だったと思う）。一人の利用者が和綴本を抱えて来館された。聞くと、亡き父上の仏壇から出てきたものだと言うが、「何分にも江戸時代の写本で、読み下せない。活字本はないか。」という問い合わせであった。表紙には「**忠臣蔵明伝 巻之一**」とあり、表紙をめくると今で言うところの内容を示す目次にあたる部分があり、『赤穂明傳』3 巻のうちの 1 巻目であることがわかる。さらに巻末から天保 14(1843)年春日井郡間之原新田の船橋甚助なる者による写本であることがわかった。

江戸時代、活字本、3 巻本、というキーワードから思いつくのは、何と書いてもいつもお世話になっている『国書総目録 補訂版』（岩波書店）。筆跡から、表紙の『忠臣蔵明傳』は後の人の命名で、「**赤穂明傳**」が当時の資料名と解釈し、探したが見つからず。念のため「**忠臣蔵明伝**」でも探すがない。同書の続編とも言うべき『古典籍総合目録』（岩波書店）にもない。それでは、主題からということで『増訂赤穂義士事典』（新人物往来社 1983）の中の「元禄義挙に関する著書」及び「元禄義挙に関する古記録・その他」の章を調べるが、該当書名は見つからなかった。が、「赤城（せきじょう）盟伝」の項に「『赤穂盟伝』ともいう。写本、5 巻 5 冊、赤穂義士の復讐の本末を記す。前原・神崎の『赤城盟伝』とは全く異なる。」とあり、5 巻というのが気になったが、藁にもすがる思いで、「**赤穂盟傳**」、「**赤城盟伝**」の両方から調査することとした。国立国会図書館、NACSIS Webcat、総合目録などを調査するが、該当資料名が出てこない。どうにも時間がかかりそうと判断し、利用者には時間をいただくことにし、お帰り願う。

2 活字本を求めて関西、九州、再び北海道

いささか手詰まり状態で、忠臣蔵の地元の図書館に最初と最後の頁のコピーを Fax で送り、調査依頼した。市史編纂室にも聞いてくれたようだが、埒が明かない。専門機関と思われた史料館においても駄目。NACSIS Webcat でヒットした『赤城盟伝：涙襟集』を所蔵する同志社大学に問い合わせるも一致せず。やぶれかぶれでネットサーフィンしていると、国文学研究資料館が『国書総目録』『古典籍総合目録』の続編、「国書基本データベース」をインターネット公開していることを知り（ただし会員登録の必要あり、登録は無料）、調査すると探していた「**赤穂明傳**」が 1 件ヒット。勇躍その所蔵館を尋ねると、『佐賀県立図書館所蔵鍋島家文庫目録 一般資料(和書 漢籍)』に掲載されていると言う。当館にも所蔵する目録なので早速確認すると「赤穂明傳(書写)[著者不明 写者不明 江戸後期]3 冊 26cm 上中下 3 巻 嘉永 2(1849)年小林某が書写したものを後年更に書写したもの、元禄 15 年の赤穂事件」とある。資料名と上中下 3 巻に期待感も深まり、またまた Fax を送り、内容の確認と活字本の有無を尋ねる。結果、内容的には一致する模様であるが活字資料はないとのこと。ここまで約 2 か月弱もかかってしまった。

活字資料の調査はあきらめ、古文書を解読してくれる団体を探すこととした。レファレンスとしては、いささかやり過ぎという思いもない訳ではなかったが、思い入れも深くなり道立文書館に聞いて、古文書解読の相談を受けているサークルを紹介してもらった。ここまでの調査結果とサークルが解読してくれるかどうかはわからないが相談にはのってくださるということをお返事文書にし、ここで長い道のりであったが、一件落着(?)…とっていた。

3 思わぬ展開 その1

後日、解読サークルの方が来館され、結局 1 冊全部を解読してくれたそうで、写本のコピー、翻刻されたもの、そして読み下し文を持参された。時間がかかった割には、満足いく回答を得られず、またサークルが解読してくれるのかどうか不明なままだったので、思いがけない来館と持参資料に恐縮してしまっただが、全部を読み下して下さったことを知り、安堵の気分であった。当課のレファレンスでは、図書館を経由してくる場合もあり、そうすると調査結果が利用者にとって満足のいくものなのかどうかわからないものも多い。それ故、このようにその後の経過がわかる、しかも利用者の望みのものが提供できた結果がわかるというのは図書館員冥利に尽きるというもので、サークルの方の来館はありがたい限りであった。

4 思わぬ展開 その2

ところが、話はまだまだ続く。さらに後日、兵庫県立図書館の友人と話していたところ、ひょんなことから忠臣蔵が話題となり、このことを思い出し、話した。兵庫県立図書館では忠臣蔵資料の収集に力を入れていることを初めて知った。友人は是非見たい、送ってくれと言うので、原文、翻刻、読み下しを送った。すると、兵庫県内の太子町古文書サークルが編集・発行した『石城明伝:赤穂之沙汰之事』(1996)の内容と良く似ていると言う。しかもこの資料は全3巻の写本を1冊にまとめたものということで、同書によると、石城は赤城のことで、赤穂城を示すとあり、『石城明伝』『赤穂(赤城)明伝』となり、冒頭の『忠臣蔵明伝(赤穂明伝)』と良く似たものであること、この2つの資料を比べると、表現や文字表記に異なる部分があるものの、ほとんど同じ記述内容で、転写本(写本を繰り返したもの)と考えられる、との回答を得た。加えて『石城明伝』のコピーを送ってくれたので、原本所有者と解読して下さったサークルにこの経過を知らせ、『石城明伝』のコピーをも送付した。さらに、太子町古文書サークルにも『赤穂明伝』の原本、翻刻、読み下しを事情を添えて送付した。

5 最後の思わぬ展開、そして教訓、大団円

つくづく感じるのは、照会機関をどこにするかということの見極めの難しさと“ゲンブツ”のあることの強味である。友人には叱られたが、最初に兵庫県立図書館に聞いていたなら、こんな回り道をしなかったかも知れない、ということである。一方当初問い合わせた地元の図書館や市史編纂室にも『石城明伝』は送付していることを知り、“ゲンブツ”があることは強味だが、あるだけでは価値はない、使われてこそ、資料を知っていてこそ価値を持つのだということに改めて実感させられる1件となった。

が、さらに話は続く。太子町古文書サークルから丁寧な文書と件の『石城明伝』を寄贈くださったのだった。これが夏も終わりの8月のことであった。亡き父上の仏壇から見つけた資料を持参し来館されてからゆうに10ヶ月もたっていた。が、時間がかかり利用者には迷惑をかけたしまったが、私にとっては、思いがけずも多くの人に助けられ気持ちのいいレファレンスであったことは間違いない。

また、忠臣蔵の季節がやって来る。12月14日がやって来ると、そう言えば回り道をしたレファレンスをやったなあ〜と、複雑な気分を思い出すに違いない。忘れられないレファレンスがまた増えた。

そして、この寄贈くださった資料『赤穂明伝』『石城明伝』ともに、当館の所蔵資料となったことは言うまでもない。

<この稿は、元課員(3月迄在籍)が執筆しました。異動しても、調査の道はつづく…。>

『北海道雑誌新聞総合目録』 ネット版鋭意更新中！

～町村立図書館アンケートから見た総合目録～

当館ホームページ上で公開の『北海道雑誌新聞総合目録』はご活用いただいているでしょうか。4月から公開を始め8ヶ月が経過しました。現在、市立図書館分の蔵書データを随時更新しております。年度が変わり、購入タイトルがどれだけ変わるかがこの目録作成当初からの懸案でしたが、雑誌の休廃刊も多くあったせいか、予想以上に変更がありました。日頃から雑誌の休廃刊は多いと思っていましたが、この目録を修正しているとより実感します。

さて、今年度は昨年度の市立図書館に加え、町村立図書館のタイトルを掲載することにしておりました。これに先立ち8月上旬に意向調査を行いました。今回はその集計結果について報告します。なお、この調査は76の町村立図書館に調査依頼をし、64館より回答を頂いております(12月1日現在)。

Q1. インターネット版「北海道雑誌新聞総合目録」をご覧になったことはありますか。

ある 41館(64%) ない 23館(36%)

Q2. インターネット版を実際に利用して所蔵館を探した事がありますか。

ある 16館(25%) ない 48館(75%)

Q1については、インターネットの環境が整っていない図書館の数を踏まえて考えても利用館は予想より少なかった感があります。また、Q2についても同様思った以上に利用されていませんでした。大会や研修などで各図書館から直接お話しを伺ったことがあります。雑誌についての問い合わせがあまりないという図書館も多いことからこのような結果になったと思われます。

また、記述式の問いには次のような意見が挙がりました。

1 デザイン・使い勝手について

- ・シンプルで見やすい。「月刊 」「 ・月刊」と両方でチェック出来て助かる。
- ・検索が簡単にできるので使いやすい。
- ・分野ごとに分かれた索引があると便利だと思う。
- ・今の状態に町村が加われば使いにくくなると思う。

2 目録事業そのものについて

- ・当館に所蔵されていない雑誌の閲覧希望があった時、目録があると非常に便利で助かる。
- ・実際に利用したことはまだないが、将来の利用の可能性は十分あるのでよい試みだと思う。
- ・総合目録は重要で大切なツールになるので、信頼される目録作成を希望します。

3 その他

- ・所蔵していない雑誌のリクエストが少ないし、あっても掲載されていない雑誌であったりと、まだ利用していないが、今後活用していきたい。暫定版でなくなる日を楽しみにしています。
- ・電算化や通信環境の整備がされていない図書館（室）へのサポートは？

お褒めの言葉、期待の言葉は大変有り難く、励みにもなります。また、問題点などについても出来る限り対応していきたいと考えています。

このような目録は、各図書館のデータが集まることによってこそ効果を発揮する協同データベースであり、皆様の協力を無くしては成立しません。進化する目録を作るために、使い勝手などについても忌憚のないご意見をお寄せください。

さて、今年度末にはネット版に町村立図書館のデータを加えたものの他に、冊子体の改訂版も発行を予定しており、現在鋭意作業を進めております。こちらの方も、期待してください。

追補：町村立図書館の購入雑誌・新聞のデータ提供は随時受け付けおります。ご不明な点がございましたら、当課までお問い合わせください。

セルフファレンス体験談の図書が出版されました

『図書館に行ってくるよ シニア世代のライフワーク探し』（近江哲史著 日外アソシエーツ 2003.11 270p 19cm ISBN4-8169-1811-6 ¥1900 せ:015/To）です。著者は日頃図書館に通っている一市民です。

図書館員が書いた図書館ガイドはこれまでもありましたが、これは、利用者の利用者による利用者のための図書館活用法がテーマです。レファレンス関係は「第2章 ちょっとモノを調べに出掛ける」。利用者の皆さんにお薦めしたいのは勿論ですが、今時の図書館事情や、図書館・図書館員へのメッセージなども盛り込まれています。利用者の視点がわかり、読みやすい上に、巻末索引の語句も豊富です。

次ページの「特別寄稿」とあわせて、是非ご一読ください。



セルフファレンスの楽しさを伝えたい

山崎敏晴氏（江別市在住）

No.5（通巻第9号）の渡辺重夫氏に続き、第2弾は、図書館利用者の立場から、山崎敏晴氏に登場願いました。

山崎氏は1959年生まれ。江別市役所に水道技師として勤務され、現在は石狩東部広域水道企業団へ出向中です。十数年前の『中谷宇吉郎随筆集』との出会いをきっかけに、雪氷学者・中谷博士に魅せられ、仕事の傍ら、博士の著作の収集や文献目録の作成のため、全国の図書館や古書店へも精力的に足を運ぶ市井の研究者です。

現在私は、ある人物の書誌作りのため、道立図書館をはじめ近隣の市町村図書館や、一般の利用が可能となった大学図書館などへも、週末や休日などを利用し調査に伺っています。また、最近では夜間開館する図書館も増え、職員の皆さんにはご苦労が増えた事だと思いますが、私などにとっては、仕事帰りにも調査する事が出来、少しの時間とはいえ、とても嬉しいことです。

今回、『Do-Re』に文章を書かせていただく事になり、内容が「レファレンスにまつわる事」という事で、普段「レファレンス」をお願いする側から思いついた事を少しだけ触れさせていただきました。「レファレンス」の事や図書館業務の認識が間違っていましたら、どうかお許し下さい。

『Do-Re』の中に「セルフファレンス」という言葉を見つけました。私も書誌作りの調査を始めた頃は、「レファレンス」の意味すら分からず、何か一つ作業をするにも司書の方を頼り、時には任せきりで担当していただいた方には随分手間をお掛けした思い出があります。『Do-Re』にも書かれていましたが、私自身も「レファレンス」＝「代行調査」だとその頃は思っていました。

作業を開始したものの、何度も壁にぶつかり、その度に司書の方にお聞きし、何時も適切なアドバイスをしていただいた事は、私にとっての文献調査のノウハウとなり、今も活用させていただいています。

それは、調査された司書の方が、調査結果だけを一方的に示すのではなく、依頼した調査内容に対してまず何かから手がけ、結果に辿り着くまでの過程や、また調査の途中で幾つかの選択肢が発生した場合、その選択したもの（レファレンス・ツール）により異なった角度からの結果が得られること、その選択は依頼者自身も選択出来るような環境を作り出していただいた事などで。また、より多くのレファレンス・ツールを知り、使いこなしていく事の大切さも教えていただきました（但し、調査内容によっては、簡単に回答の出来る場合もあることと思いますので、全てに対してでは有りませんが）。

私が知らないだけかも知れませんが、一般者向けのレファレンス講座や講習会は少なく、多くの利用者の方は図書館へ調査に来て方法が分からないと思います（そのために「レファレンス」担当の方がいらっしゃるのでしょうか）。当然手間は掛かりますが、何を調べたいのかは、自分自身が一番把握をしている訳ですから、自ら追求していく事が出来れば一番自分の目的に合った調査結果が得られるはずです。

是非機会がありましたら、講習会等を開催していただき、「レファレンス」の大変さや面白味を伝えていただきたいと思います。折角、図書館の方が頑張って環境を整えられても、利用者側が使いこなせないが無駄になってしまうような気がします。

今まで書いたことは、ごく一部の方に限られた事かもしれません。多くの方は、調査結果のみを早く知りたいと思います。しかし、そんな時でも回答に至るまでの調査方法や苦労話を是非話していただきたいと思います。意外と依頼者の方は皆様のご努力を知らない場合が多いと思われるからです。

別の視点で「レファレンス」は、調査依頼に来た人だけではなく、図書館に来られた人みんなが、館内へ一歩足を踏み込んだ時からサービスは始まっているものだと感じます。例えば、事前に借りる本を決めてきた人であれば、その書棚へスムーズに行けるよう導いたり、何かの調査であれば、何処の書棚へ行けばどのような本があるなど案内を出したり、図書館にとって当たり前の事かも知れませんが、これらも利用者にしてみれば気づかぬうちに「レファレンス（手助けする）」を受けているものだと思います。

旅行や出張に出かけた時など、出来るだ

けその地の図書館へ行くことにしています。そして、何時も決めた一冊の本を（比較的何処の図書館にも有るような本を）探すようにしています。その図書館での探しやすさや、室内の様子、案内板のレイアウトなども参考にさせていただいています。（別に私が図書館を作るわけでは無いのですが）

先ずは、自分自身で参考文献のページを捲る。難解と思われるものであっても一度は自分で追求してみる。すると図書館司書の方の苦労と達成感を感じ取る事が出来るのではないのでしょうか。私は、少しでも多くの人にそれを感じていただきたいと思っています。

最後になりますが、読ませていただいた『Do-Re』のバックナンバーの中に、「今までにこんな質問がきました」を拝見致しましたが驚きの一言でした。

どうか図書館司書のみなさん、解答率100%を目指して、頑張ってください。

<主要な著書一覧>

-
- 『〈中谷宇吉郎〉に関する所蔵図書調査集計一覧 No.1 北海道編』山崎敏晴編・刊 1998
「中谷宇吉郎著書諸版目録（稿本）1」『文献探索 2000』文献探索研究会 2001
「〈本の世界〉から探る中谷宇吉郎」『ミクروسコピア 18巻2号』ミクロスコピア出版会 2001
『北海道大学創基125周年記念展示 中谷宇吉郎展示目録』山崎敏晴編・刊 2001
「文献から探る〈中谷宇吉郎〉の業績」『北の文庫 第32号』北の文庫の会 2002
「中谷宇吉郎著書諸版目録（稿本）2」『文献探索 2001』文献探索研究会 2002
-

Librarian's Box (ししょぼこ)

図書館とJISの意外な関係

JIS (Japanese Industrial Standard) といえ、日本工業規格。図書館と関係があるというのも、不思議な感じがしませんか？『図書館パフォーマンス指標』が JIS というのは記憶に新しいところですが、実は、ISBN や ISSN、雑誌名や機関名の略記法なども JIS なのです。ISO 規格を採り込んだものが多いようです。現在、図書館関係の JIS は 17 冊あり、一覧にしてみました。

書名(上段)・規格番号等(下段)	刊年	頁	価格	請求記号
図書館パフォーマンス指標 JIS X0812:2002 (ISO 11620:1998)	2002	48	2700	013.5/To
機関名の情報交換用表記方法 JIS X0802 - 1989 2000 確認	1990	10	500	014.32/Ki
雑誌名の情報交換用略記方法 JIS X0801 - 1989 2000 確認	1990	14	700	014.32/Z
シソーラスの構成及びその作成方法 JIS X0901 - 1991 1996 確認 2001 確認	1991	24	1000	014.35/Sh
国際十進分類法 UDC JIS X0307 - 1989 1995 確認 2000 確認	1990	15	700	014.45/Ko
電子文献の引用法 JIS X0807:1999 (ISO 690 - 2:1997)	1999	19	1400	014.9/D
ドキュメンテーション用語 基本概念 JIS X0701 - 1989 1995 確認 2000 確認	1990	8	450	014.9/D
ドキュメンテーション用語 文献 JIS X0702 - 1989 1995 確認 2000 確認	1990	7	450	014.9/D
ドキュメンテーション用語 文献及びデータの収集、特定及び分析 JIS X0705 - 1989 1995 確認 2000 確認	1990	5	400	014.9/D
ドキュメンテーション用語 ドキュメンテーション言語 JIS X0706 - 1989 1995 確認 2000 確認	1990	10	500	014.9/D
情報検索(Z39.50)応用サービス定義及びプロトコル仕様 JIS X0806:1999 (ISO 23950:1998)	1999	272	8200	014.9/J
書誌データ要素台帳 第3部 情報検索 JIS X0805:1998 (ISO 8459 - 3:1994)	1998	35	2200	014.9/J
電子的文献交換 GEDI JIS X0811:2002 (ISO 17933:2000)	2002	43	2600	015.38/D
図書館相互貸借応用のプロトコル仕様 第1部 プロトコル仕様 JIS X0809:2001 (ISO 10161 - 1:1997 / Amd. 1:1998 / Amd. 2:1999)	2001	119	4700	015.38/To
図書館相互貸借応用のサービス定義 JIS X0808:2001 (ISO 10160:1997 / Amd. 1:1999)	2001	70	3300	015.38/To
国際標準逐次刊行物番号 ISSN JIS X0306:1999 (ISO 3297:1998)	2000	8	800	023.9/Ko
国際標準図書番号 ISBN JIS X0305:1999 (ISO 2108:1992)	2000	6	700	023.9/Ko

課員のつぶやき

日々の業務からの短信

司書であるということは・・・

みなさんはどういう経緯で今の職（司書・図書館職員）に就かれたのでしょうか。「最初から決めてました！」という方から、「異動でたまたま・・・」という方まで、さまざまいらっしゃることでしょう。

私事になってしまいますが、私は本屋のアルバイトに始まり、大学図書館の非常勤職員・臨時職員、道の施設の臨時職員(図書室担当)と、今思えばすべて道立図書館へ通じる！？と思えるほど、ゆっくりではありましたが、図書館から大きく離れることなくなんとかここまで歩んできたのでした。

さて、そんな私が道立図書館の採用試験の最終面接で宣言した言葉とは・・・。「目録業務はできます。カウンター業務もできます。図書館業務なら一通りこなせます！！」。面接なので自分をとことんアピールしなくてはならない状況とはいえ、自分でも「あながちウソではないだろう」とその時は思っていたのです。ところがのちに（働き始めて8ヶ月たった今でも）こんなにも自分の無力さや不勉強を恥じる羽目になろうとは・・・！

これまでの経験が役に立たなかったということは決してありません。書店での経験は、物流の仕組みや売れ筋の本などを知るいい機会となりました。大学図書館では、書誌データを今後の財産として耐えうるよういかに忠実に作っていくか、排架をいかにわかりやすく機能的にすべきか、学生への利用者教育をいかにすべきか等々、大学図書館の機能や働きを学べました。また施設の図書室をほぼまかされた時には、図書室の運営について考える（実現には至りませんでした）ことも。

しかし、公共図書館で全住民を対象としてサービスしていくための柔軟性や公務員としてのあり方などは、やはり働いてみなければわからないことでした。

長年司書として働いていらっしゃる諸先輩方にはすでに述べるまでもないことですが、カウンターに立ったり、事務室で電話を受けたり、日々住民の方と接し対応している私たちにとって、そして毎日たくさんの出版物が世に出て、たくさんの情報が行き交う状況の中でこれらを扱わなくてはならない私たちにとって、司書というのが「年働けば一通り習得できる」ような仕事でないのは明白です。

そして今私が従事している参考調査業務というのは、まさに一期一会。常に状況が進展していく中で、お客さまに「また利用したい」と思っただけのような新鮮で的確な情報をいかに提供していくか。まだまだ未熟ながら、「お客さまが先生です（道立の場合、市町村の図書館の方々もまた先生です）」と思いつつ、奔走している毎日です。

司書への憧れや「好きだから・・・」という理由だけでここまでやってきた私ですが、大事なのは、夢が実現してからだということに今更ながら気づきました。しかし、好きなことを一生の仕事にできたのは本当に幸運です。10年後、20年後、30年後に、どれだけ司書としての自分がステップアップできているのか、そしてどれだけ北海道の図書館（いきなり話が大きくなってるなぁ）の進展に貢献していくことができるのか、今から楽しみでもあり、今の自分への大きな課題であります。

NEWS

各種研究集会等への参加・協力

一日図書館フェスティバル（於苫前町公民館 10月29日）に桑原が参加。エプロンシアターでは『くまどんときつねどん』『かえるののどじまん』を演じました。250人の参加者数だった由。

恵庭市立図書館職員研修会（於恵庭市立図書館 10月31日）で「レファレンス業務の実際」について樋山が講師を務めました。

紋別地区図書館（室）職員等研修会（於西興部村公民館 11月3日）に桑原が参加。「図書館における著作権」「レファレンスツールとしてのインターネット」の2点について講師を務めました。

全道図書館研究集会（テーマ「子どもの読書活動」 於札幌市 11月27日～28日）に桑原と大塚が参加。『意見交換』の司会を桑原が行いました。

全国図書館大会（於静岡市 11月27日～28日）に加藤が参加。開会式に続く全体会は、珍しい対談形式でした。講師は齋藤孝明治大学教授（『声に出して読みたい日本語』の著者）とヴォーカリスト鈴木重子2氏による「生きることと表現すること」と題するテーマで行われました。

平成15年度北海道職員新採用職員（後期）研修（於北海道自治政策研修センター 12月2日～5日）に伊藤が参加。

相互貸借等の新しいルールづくりのため、北函振「北海道相互協力委員会」が発足しました（於当館 11月14日）。貸借業務に関係するということで、当課からも桑原が委員になりました。

「道民ホール展」（於道庁 11月4日～7日）成功裡に終了。来場者2250名でした。

調べ学習校から招待状

10月1日に総合的な学習の一環として「調べ学習」のために江別市立文京台小学校5年生46名が来館。

発表会 ポスターセッション（11月21日）に招きをうけました。参考調査課からも、伊藤、樋山の2名が学校訪問しました。

来館研修などにも協力

石狩管内高等学校図書館業務担当者研究会情報収集研究班学習会が当館を会場に実施（10月25日 13人）。午後の半日を、レファレンスインタビューやレファレンスの対応などについて樋山が講義し、その後に館内見学を行いました。

北海道教育大学岩見沢校の歴史学ゼミナールの学生（11月21日 14名）が来館。館内見学の後に当課を訪れ、「インターネットによる情報の集めかた」を中心に、レファレンス現場での対応について説明を行いました（加藤、大塚担当）。

<お願い FAXのスイッチについて>

当館からファクスでレファレンス回答を送信しても、土・日曜日や夜間などは、なかなか受信されないことが少なくありません。休館時はファクスのスイッチを切るところが多いのかもしれませんが、常時「オン」にさせていただくか、何時から何時まで（または何曜日）は着信不可と付記していただくと助かります。ご協力をお願いします。

編集後記

表紙のツリーがクリスマスバージョンに変わりました。一昨年は、発行が間に合わず「門松」、去年は時期を逃しいつものツリー。3年越しのお化粧となりました。(on)

行政改革の波は、公共図書館を侵しはじめている。市民の読書生活を豊かにしている図書館も、行政組織の一環であって聖域ではないわけだ・・・、苦しさ増す図書館予算 28館マイナス 専門書買えぬ・・・。押入れから出てきた新聞切抜き。何と！昭和59・60年のものです。調べてみると中曽根内閣の時でアリマシタ。(み)

この秋は出張三昧。日常業務は課員の皆さんに任せっぱなしで申し訳なかったです。多分野にわたる出張で改めて思うに、図書館員に必要なのは飽くなき好奇心と・・・体力ですね。(KU)

11月の道庁展示が無事終わりました。展示準備で思わぬ資料を見つけることもあり、道立の書庫の奥深さを実感。今後の何かの調査に生かせればいいな思いました。(H)

早いものでもう師走です。「師走」・・・実はつい先日まで、「(学校の)先生が走る」のだと思っていました・・・。これは俗説で、語源をたどればお坊さんだったんですね(他説もあり)。毎日「へえー！」を連発の私ですが、来年こそは参考調査課らしく、もっと物知りになりたいです。(I)

山崎さんの特別寄稿はいかがでしたか？ 利用者のお役に立ちたいと仕事をしているつもりでも、利用者自身がひとりでも調べやすい環境、また、図書館員に聞きやすい環境をどこまでつくっていたかと反省します。利用者の本音を聞く機会はなかなか無いので、ご多忙の中、快く原稿を引き受けていただけたことに感謝するとともに、貴重な寄稿となりました。(ひ)

今年も1年、皆様には大変お世話になりました。来年もよろしくお願いします。どうぞ、よいお年をお迎えください。(編集部一同)



Do - Re(どうれ) の由縁

“ どうりつとしょかんレファレンス ” の略から名付けました。
しかしながら “ Do ! Reference ” と
あるいは “ どれどれレファレンス ” からとの説もあります。

THE REFERENCE NEWSLETTER OF HOKKAIDO PREFECTURAL LIBRARY

Do - Re

北海道立図書館レファレンス通信 13(通巻17号)

発行年月日 平成15年12月16日

編集 北海道立図書館参考調査課

発行 北海道立図書館

〒069-0834 北海道江別市文京台東町41番地

Tel 011-386-8521 Fax 011-386-6906

ホームページ <http://www.dokyojoi.pref.hokkaido.jp/hk-tosho/top.htm>
